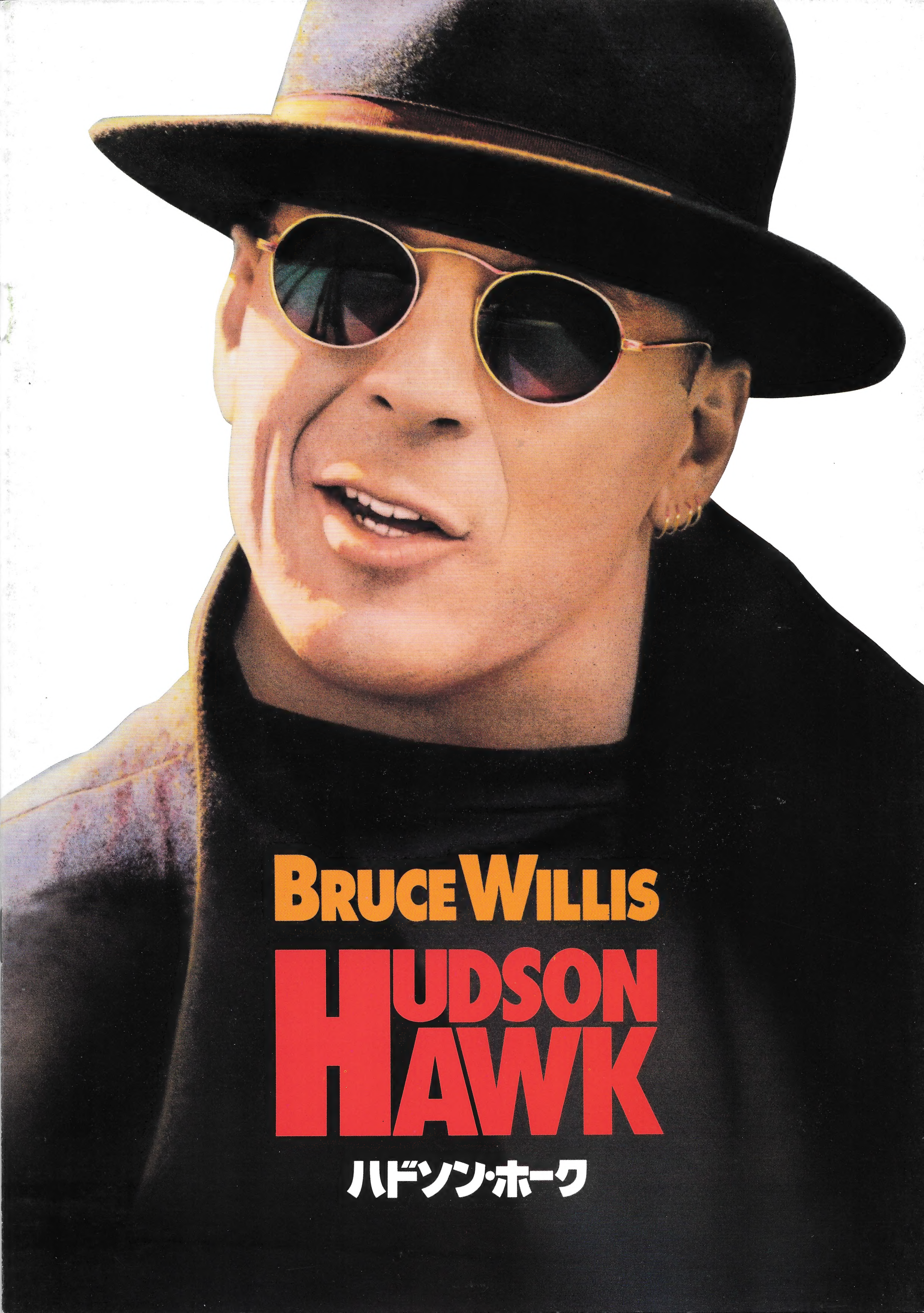

BRUCE WILLIS
HUDSON HAWK
ハドソン・ホーク



# ハドソン・ホーク

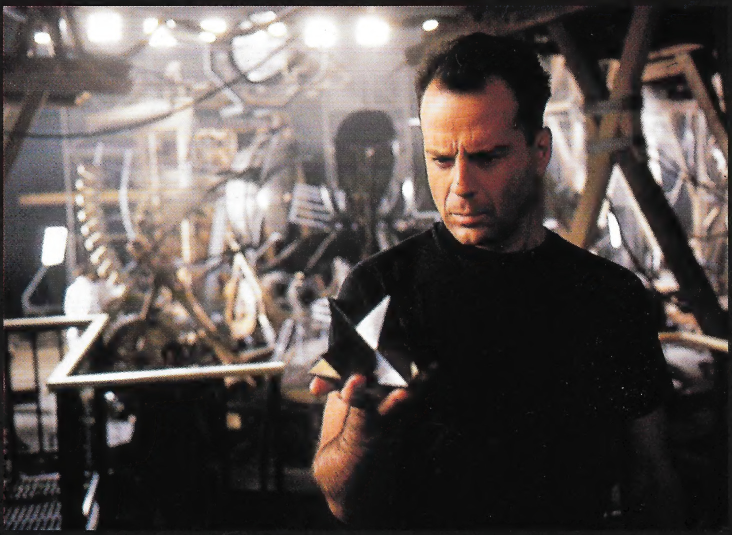



トライ スター映画提供 シルバー・ピクチャーズ/エース・ボーン・プロダクション ブルース・ウィルス/ダニー・アイエロ/アンディ・マクダウェル in マイケル・レーマン・フィルム
"HUDSON HAWK" リチャード・E・グラント/サンドラ・バーンハード/ドナルド・バートン/ジェームズ・コバーン 衣裳デザイナー マリリン・バンス=ストレイカー
音楽 マイケル・ケイメン&ロバート・クラフト アソシエイト・プロデューサー デビット・ウィリス&スザンヌ・トッド 共同製作 マイケル・ドライハースト 編集 クリス・リーベンゾン
プロダクション・デザイナー ジャック・デゴビア 撮影 ダンテ・スピノッティ, A.I.C. 製作総指揮 ロバート・クラフト ストーリー ブルース・ウィリス&ロバート・クラフト
脚本 スティーブン・E・デスーザ&ダニエル・ウォーターズ 製作 ジョエル・シルバー 監督 マイケル・レーマン

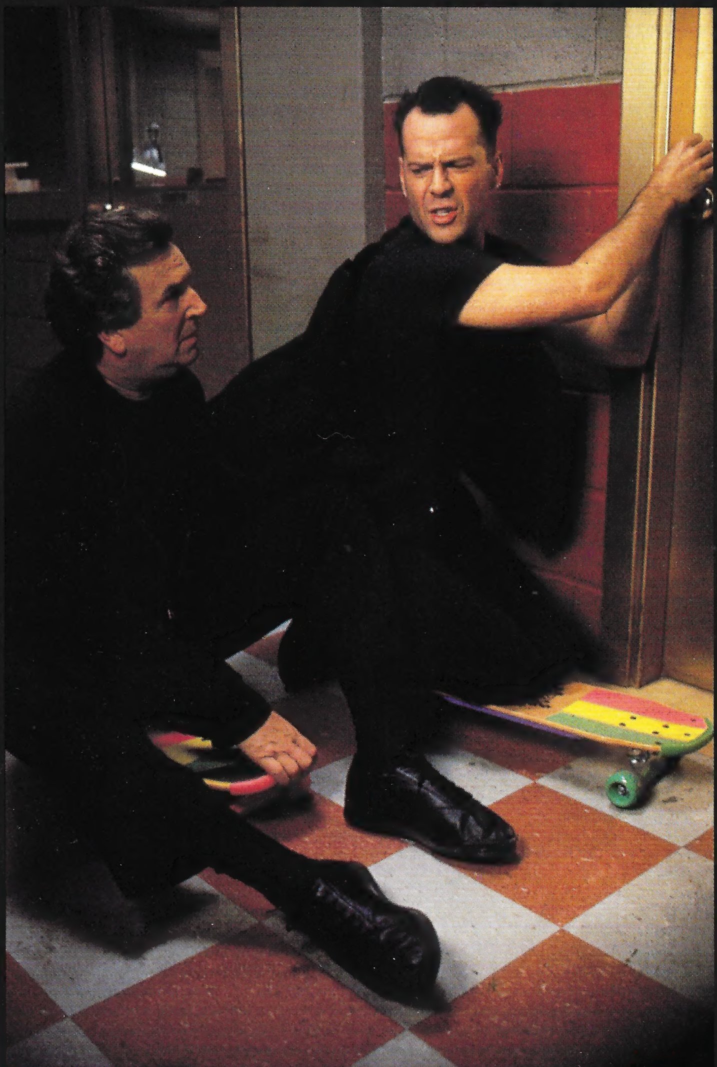
SPECTRAL RECORDING DOLBY STEREO SR IN SELECTED THEATRES
オリジナル・サントラ盤/SLCレコード：原作/新潮文庫刊 TVゲーム発売元/EPIC・ソニーレコード

A TRI-STAR RELEASE









# INTRODUCTION　解説

## 一杯のカプチーノを愛するおしゃれで危険な男。ヤツは、女ごころまで盗んでしまう



ブルース・ウィリスといえば「ダイ・ハード」。「ダイ・ハード」といえばブルース・ウィリス……だった。今後は「ハドソン・ホーク」が、ウィリスの代名詞になるだろう。

いま人気最高の映画スター、ウィリスの新作である。マクレーン〈刑事〉から〈快盗〉ハドソン・ホークへ、正義のヒーローから悪のヒーローへの大胆なイメ・チェンだ。世界中から〈興奮〉を盗む華麗な怪盗。それは女と一杯のカプチーノを愛する危険な男。シャイだけれど大胆不敵。オシャレでかっこよくキメているが、ドジなところもある。しかし、引き受けた仕事はキレる頭をフル回転させて、超一流のプロとして大活躍する。それが「ハドソン・ホーク」の新しい魅力と面白さである。





## アメリカからヨーロッパへ ダ・ビンチの秘宝を求めて、強烈アドベンチャー！

10年間の刑期を終え、出所したばかりのハドソン・ホーク（B・ウィリス）に国際的陰謀団のリーダー、メイフラワー夫妻から予期せぬコンタクトが入った。昔のパートナーだった、トミー（ダニー・アイエロ）の生命と引き替えに、世界的な文化遺産を盗めというものだった。それは、ニューヨークとヨーロッパ各地の美術館に収められている、世紀の天才レオナルド・ダ・ビンチが残した芸術品の数々。〝スフォルツア〟の騎馬像、古写本〝コデックス〟……ハドソンは旧友の生命を守るため、やむなく仕事を引き受けることになった。その時、この要求の裏に秘められた巨大な罠に、ホークはまだ気づいていなかった……。

数年前からウィリス自らが練り続けていた企画を実現させたのは「ダイ・ハード」でコンビを組んだ製作者ジョエル・シルバー。ニューウエイブ派の青春映画「ヘザース／ベロニカの熱い日」の新鋭マイケル・レーマンを監督に起用し、総製作費として破格の4000万ドル強を投入。ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン、ローマ、ブダペストなど全米、ヨーロッパ各国でロケを敢行し、巨大なスケールで描く正真正銘のエンターテインメント超大作である。

この屋台骨を支えたのは数々のヒット作を手掛けたスタッフたち。脚本は「48時間」「コマンドー」「ダイ・ハード」シリーズのスティーブン・E・デスーザと「ヘザース」のダニエル・ウォーターズ。音楽は「ダイ・ハード」シリーズのマイケル・ケイメンと「リトル・マーメイド」のロバート・クラフト（製作総指揮／ストーリー兼任）。撮影を「フォエバー・フレンズ」のダンテ・スピノッティが各々担当。SFXスーパーバイザーは「バットマン」「007」シリーズのデレク・メディングスで見事な仕上がりを見せた。公開前の予想通り、'91年の全米夏興行を席巻し、話題を独占した。

共演陣もバラエティ豊か。ハドソンの相棒トミーには「ドゥ・ザ・ライト・シング」でオスカーにノミネートされた名優ダニー・アイエロ、「セックスと嘘とビデオテープ」「グリーン・カード」のアンディ・マクダウェルが謎の美女にそれぞれ扮して好助演。また、CIAエージェント役で「電撃フリント GO GO 作戦」も懐かしいベテランのジェームズ・コバーンが健在ぶりを見せる。ほかに「ウィズネイルと僕」のリチャード・E・グラント、「カジュアル・セックス？」のサンドラ・バーンハード、「アンタッチャブル」のドン・ハーベイ、「ツインズ」のデビッド・カルソー、「ブレイキング・イン」のロレイン・チューサン、ドナルド・バートンらが個性的な持ち味を十二分に発揮している。

（1991年シルバー・ピクチャーズ／エース・ボーン・プロ作品／トライ　スター映画提供／コロムビア トライ　スター映画配給／原題「ハドソン・ホーク」／ビスタビジョン／ドルビー／6巻／2740m／1時間40分／翻訳：戸田奈津子）





## STORY ストーリー

ニューヨークのシンシン監獄から10年の刑期を終えた一人の男が出所した。イキな帽子にコートをはおり、全身ブラックでキメたこの男こそ、世紀の大怪盗“ハドソン・ホーク”こと、エディ・ホーキンス（ブルース・ウィリス）だった。待っていたとばかりに悪事の誘いをかける悪徳観察官のゲート（バート・ハリス）だったが、ホークにはもう以前の仕事に戻る意思はなかった。

親友のトミー（ダニー・アイエロ）の店で娑婆の空気を楽しむホークの前に、ニュージャージーのマフィア、マリオ・ブラザース（フランク・スタローン／カーマイン・ゾゾラ）が現れた。彼らに脅迫され渋々仕事を引き受けたホークは、トミーと共にオークション会場に侵入した。10年の歳月はホークの腕さえ鈍らせたのか、危うく捕まりそうになりながらも、レオナルド・ダ・ビンチが残した芸術品〈スフォルツア〉を盗み出すことに成功する。マリオ・ブラザースに届けるとそこにゲートも待ち構えていた。しかしゲートはその場にいたもう一人の人物アルフレッド（ドナルド・バートン）に殺されてしまう。

さらに翌朝の新聞には“オークション会場に侵入した二人組の泥棒、失敗に終わる”と報じられていた。

嫌な予感を覚えながらもホークは、オークション会場へと向かう。オークションが始まると、昨夜盗んだはずの〈スフォルツア〉が出てきた。ウルトラリッチな雰囲気を漂わすメイフラワー夫妻（リチャード・E・グラント／サンドラ・バーンハード）が、それをセリ落とそうとしていた。何かがおかしい。ホークは隣りあった謎の美女アナ・バラグリー（アンディ・マクダウェル）に声をかけた瞬間、巨大な爆発音が起こった。間一髪アナの命を救ったが、続けて落ちてきたペガサス像に激突、失神してしまう……。

目覚めた所は救急車の中、そこにはマリオ・ブラザースが乗っていた。ブルックリン橋の車道に担架のまま放り出されたホークは、必死の思いで逃げ出すが、運の悪いことにCIA捜査官ジョージ・キャプラン（ジェームズ・コバーン）と彼の軍団キャンディ・バーとハチあわせ！一瞬の機転で逃げ出そうとしたが、多勢に無勢、結局捕えられて殴り倒されまたもや失神した。

次にホークが目覚めたのは、なんとローマだった。そこでホークは、オークション会場で出会った奇妙な夫婦メイフラワーが世界制覇を企んでいて、そのためにマリオやキャプランを使って自分を誘拐しようとしていたことを知る。

彼らは“ある物”を集めるために最高の怪盗を必要としていた。彼らはトミーを人質に、協力しなければ彼を殺すとホークに告げる。親友の命と引き換えとあってはホークもうなづかざるを得なかった。次の目標は、1世紀もの間バチカン博物館に眠る、ダ・ビンチ作のスケッチブック〈コデックス〉だ。

博物館に下見に行ったホークはそこでオークション会場で会ったアナに再会する。ホークはアナと二人になるチャンスをつかむが、その夜博物館に侵入して見事奪い取った〈コデックス〉を彼女に発見されてしまう。ホークは好物のカプチーノに睡眠薬を入れられてダウン、その隙にホークを見張っていたキャンディ・バーらは、アナや〈コデックス〉もろともホークを連れさるのだった。

ホークが盗み出した〈スフォルツア〉〈コデックス〉、そしてキャプランがパリのルーブル美術館から盗み出した〈ヘリコプターの模型〉、これらに共通するのは、すべてがダ・ビンチの作品だということである。

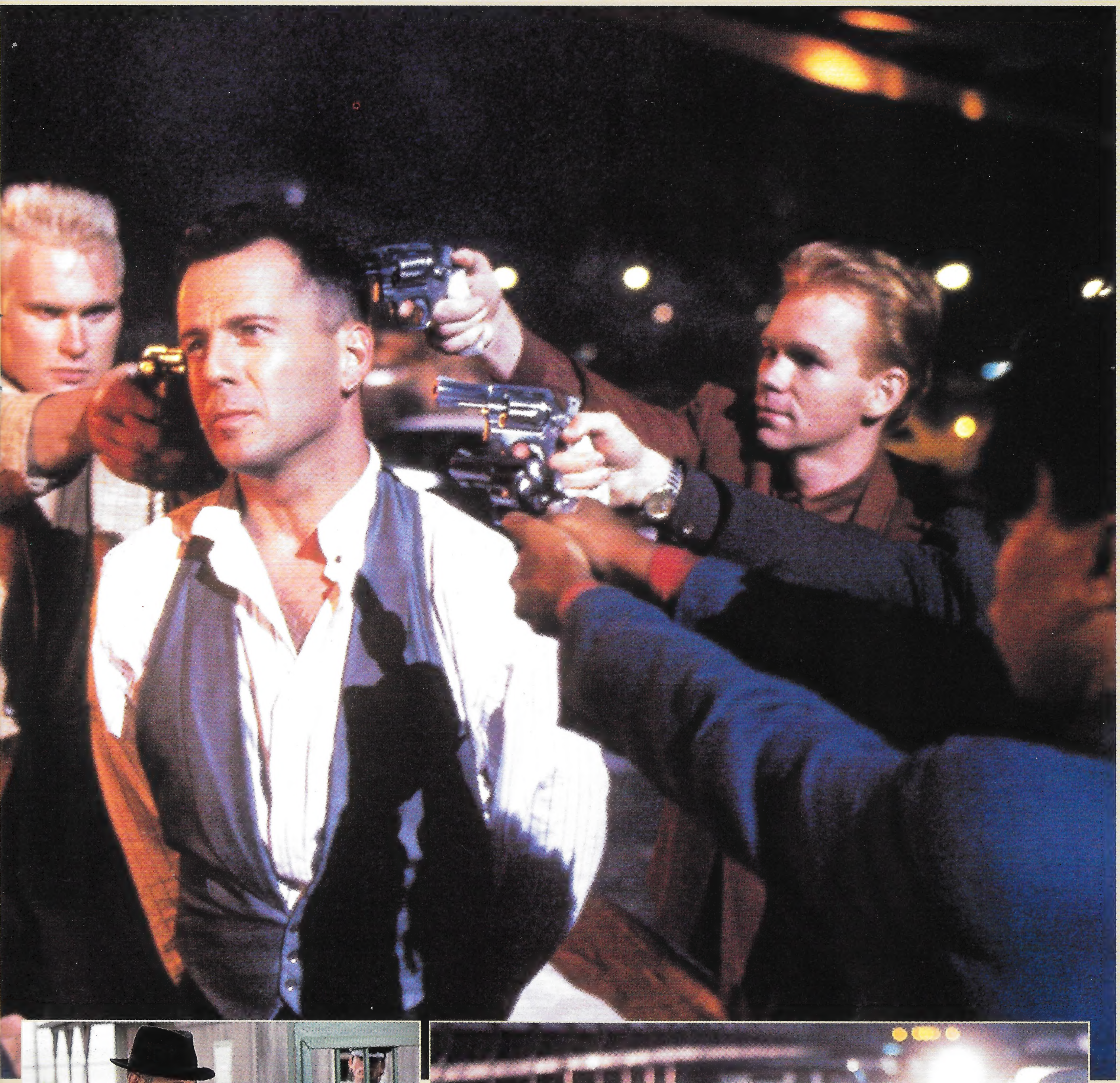
メイフラワー夫婦の目的はこれらの中に隠されていたクリスタルである。3つのクリスタルを組み合わせ、それをダ・ビンチの工房に今も残るマシーンにセットすれば、彼らの世界制覇目的は達成されるのだ。

ホークは人質となっていたトミーと共にメイフラワー夫妻のもとから脱出し、アナと途中で合流して一夜の休息を取る。しかし、翌朝になって再び、キャンディ・バーらが現れ、アナを連れ去っていく。実は彼女は世界最高のダ・ビンチ研究家であり、メイフラワー夫妻の野望を打ち砕くべく捜査していたバチカンのシスターだった。

ホークはトミーと共にアナを助けるべく、メイフラワー夫妻のいるダ・ビンチの工房へと忍び込む。そして――この息もつかせぬアドベンチャーは、さらに凄味をましてラストへとつき進む！



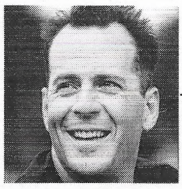
**1481年、ミラノ公爵は、巨大な馬の像〈スフォルツア〉を作るようにとあるアーチストに命じた。彼こそレオナルド・ダ・ビンチだった。しかし、戦争が勃発し素材の銅は戦争の武器のために使用され、製作が中断された。ダ・ビンチは、鉛から銅を作り出すマシーンを発明する。それは銅どころか純金を生み出した……**











## ブルース・ウィリス (ハドソン・ホーク)

## BRUCE WILLIS as HUDSON HAWK

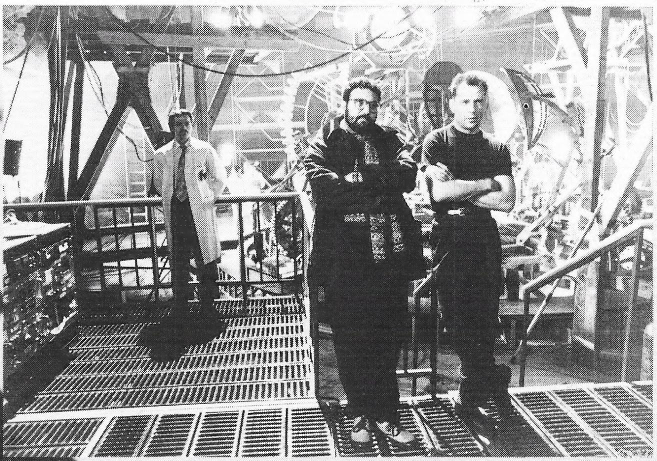
正義のヒーロー、マクレーン刑事からピカレスク・ヒーロー、ハドソン・ホークへの変身ぶりは、何と鮮やか！人気絶好調のウィリスの活躍ぶりは留まることを知らない。1955年３月19日西ドイツ生まれ。父は米国軍人。母はドイツ人。生後２年目に家族とともにニュージャージーへ移る。ハイスクールを卒業後、職を転々。"ルーズ・グース"というバンドにも参加したりした。ふと思いたって入学した大学では演劇を専攻、俳優の道をめざす。

'84年サム・シェパードの舞台「フール・フォア・ラブ」に代役で出演。'87年TV「こちらブルームーン探偵社」に3000人の候補者の中から選ばれた。驚異的な視聴率を稼いだのをきっかけに'87年「ブラインド・デート」で映画デビュー。「キャデラック・カウボーイ」（V・'88）に続く「ダイ・ハード」（'88）が大ヒット。「ダイ・ハード２」（'90）でトップ・スターの座を揺るがないものにした。

これ以外にも「ベイビー・トーク」シリーズの主人公マイキーの声の吹き替えでも話題に。ベトナム帰還兵を題材にした「イン・カントリー」（V）、トム・ウルフ原作の「虚栄のかがり火」、デミ・ムーアと夫婦初共演した"MORTAL THOUGHTS"、ジョエル・シルバー製作、ダスティン・ホフマン共演作"BILLY BATHGATE"など、この後も大作、話題作が目白押しだ。



映画作りのビギナーとしては、期待していた通りの映画に仕上がったと、ウィリスは語る。「こちらブルームーン探偵社」の軽妙さや「ダイハード」「007」などのパロディも取り入れ、単純明快な娯楽作品として、ウィリス自身も楽しみながらの撮影だった。冒険好きで、ジョークをとばし、ジャズを口ずさむホークのキャラクターはウィリス自身。シリアスな場面で、歌いながら踊り出すシーンがあるが、それは実生活そのものだと言う。自分で企画したこの作品に、自信満々のウィリスである。







# ブルース・ウィリスが愛した泥棒映画

永野 寿彦
（シネマ・イラストライター）

最近のアメリカ製娯楽映画は、ホントにおもしろい。いや、おもしろ過ぎるといってもいい。ハンバーガーやフライドポテト、それにコーラなんかを買い込んで、程よく埋まっている座席の中に空席を見付けて座り、場内が暗くなってから始まるスクリーン上に展開される派手なドンパチや、あれよあれよのテンポで進む奇想天外ストーリーに身を任せているだけで、存分に楽しめてしまうものばかりである。

『ハドソン・ホーク』は、そんな絶対安心娯楽映画にすっかり慣れてしまった人にとって、ちょっとビックリしてしまう映画だろう。それは、この映画がそうした娯楽映画たちとは流れの違う、のんびりとしたムードの懐かしのアクション・コメディになっているせい。

あの絶対安心娯楽映画の代表的な作品である『ダイ・ハード』シリーズで、現代のアクション・スターとしての座を獲得したブルース・ウィリスが、世界を股に架けて大活躍する泥棒に扮する――そう聞けば誰だって、もの凄くスリリングな興奮また興奮のアクション活劇を期待してしまうだろう。ところが、この映画に登場する怪盗〝ハドソン・ホーク〟は、10年間の刑務所暮らしで、アメリカでも大ヒットしているニンテンドー（ファミコンのこと）も知らない、盗む時にも絶対ハイテクに頼らないぞと意地を張ってしまうような古風な泥棒なのだ。おまけに、時間を決めて仲間と同時に計画を実行する、という普通ならスリルたっぷりに描かれる場面で、この泥棒は仕事に必要な時間と同じ長さの歌を選び出し、その歌を歌いながら盗みを働くのである。そのシーンのノンキさだけでも、スピード感溢れる映画に慣れた今の映画ファンを驚かせるのに充分だ。

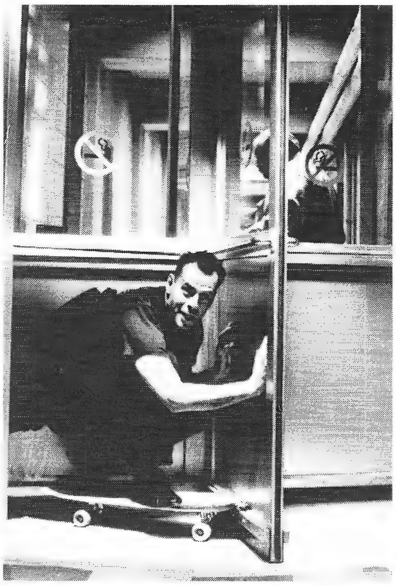
大体、泥棒映画という題材そのものが時代錯誤的でないか。アルフレッド・ヒッチコック監督の『泥棒成金』やマルコ・ビカリオ監督の『黄金の七人』、ブレイク・エドワーズ監督の『ピンクの豹』といった傑作泥棒映画が生み出された50年代後半から60年代前半にかけての時代こそが一番相応しい。

だが、実はそれこそがこの映画の企画・原作者でもあるウィリスの狙いなのだ。

思い出してほしい。『ダイ・ハード』でテロリストのリーダーに「憧れの英雄はジョン・ウェインかね？　それともランボーかね？」と訊かれ、「ロイ・ロジャースが好きだった」と答えていたウィリスを。

この『ダイ・ハード』での台詞は、脚本にも書かれていたことだろうが、「ロイ・ロジャース……」と答える台詞が完全に自分のものになっていたことから考えても、ウィリス自身の好みが反映されているはずである。そのロイ・ロジャースという人物こそがキー・ワードなのだ。彼は、映画史上に残る有名な西部劇で勇姿を見せていたジョン・ウェインやゲーリー・クーパーなどとは違い、日本ではあまり評価されていない西部劇の主演スター。〝歌うカウボーイ〟




というスタイルで西部劇に主演していた人なのだ。だからこそ、『ハドソン・ホーク』に登場する泥棒は“歌う大泥棒”だったりするのである。

　『ハドソン・ホーク』は、40年代から60年代作られていた映画の中で、映画史から忘れかけられている娯楽映画の楽しさをそっくりそのまま再現したような映画なのだ。

　例えば、活劇コメディの代表的な作品『電撃フリント』シリーズ。007映画の人気に便乗したかのように作られたスパイ活劇で、なにやら得体の知れない発明品（“災害発生マシーン”なんてのがあった気がする）によって世界征服を企む秘密組織を相手に、女にモテモテのエージェント、フリントが痛快というかバカバカしいというかの活躍を見せ、救ってしまうというものだった。

　それから、『サイレンサー』シリーズというのもあった。こちらも女好きのマット・ヘルムという秘密工作員が、これまた荒唐無稽そのものの計画（こちらも“空飛ぶ円盤”なんてものを使った計画があった）を駆使して世界征服を夢見る組織と闘う話であった。

　これらのストーリー展開は、レオナルド・ダ・ビンチの発明品によって世界征服を狙う秘密組織を相手に、ハドソン・ホークが大奮闘する、というこの『ハドソン・ホーク』にそっくりである（しかも、『電撃フリント』シリーズで主人公フリントを演じていたジェームズ・コバーンが、ＣＩＡのエージェント役で登場しているのだ！）

　おまけに、『ハドソン・ホーク』は家族揃って楽しめるような良質のコメディにもなっている。それはディズニーが作っていた実写版コメディ作品の楽しさ。これもまた、前述の活劇コメディ同様、アニメ作品に比べて低く評価されているものばかりだ。

　世界征服をエキセントリックに叫ぶメイフラワー夫妻のヘンな魅力、手先となって働くイタリア人マフィアのマリオ・ブラザーズの役立たずぶり、発明品横取りを企むＣＩＡのマヌケ部隊……など、『ハドソン・ホーク』に登場してくる悪役たちは、まるで、『ラブ・バッグ』シリーズや『シャム猫ＦＢＩ／ニャンタッチャブル』などで、主人公たちに振り回されるおかしなおかしな悪党の後継者といった感じである。

　そういった忘れかけられている映画のおもしろさを詰め込んだ、この『ハドソン・ホーク』を観ていると、日本が生んだ大泥棒『ルパン三世』の「イキにやろうぜ、イキによ」という台詞を思い出してしまう。人生を深く考えるだけじゃなく、嫌なことを忘れるためだけじゃなく、映画そのものを楽しんでしまおうよ、と語ってくれている気がするのだ。

　10年も前からこの映画の企画を暖めてきたというウィリスは、自分が愛したそれらの映画たちが持っていた楽しさを復活させたかったに違いない。









Inc.





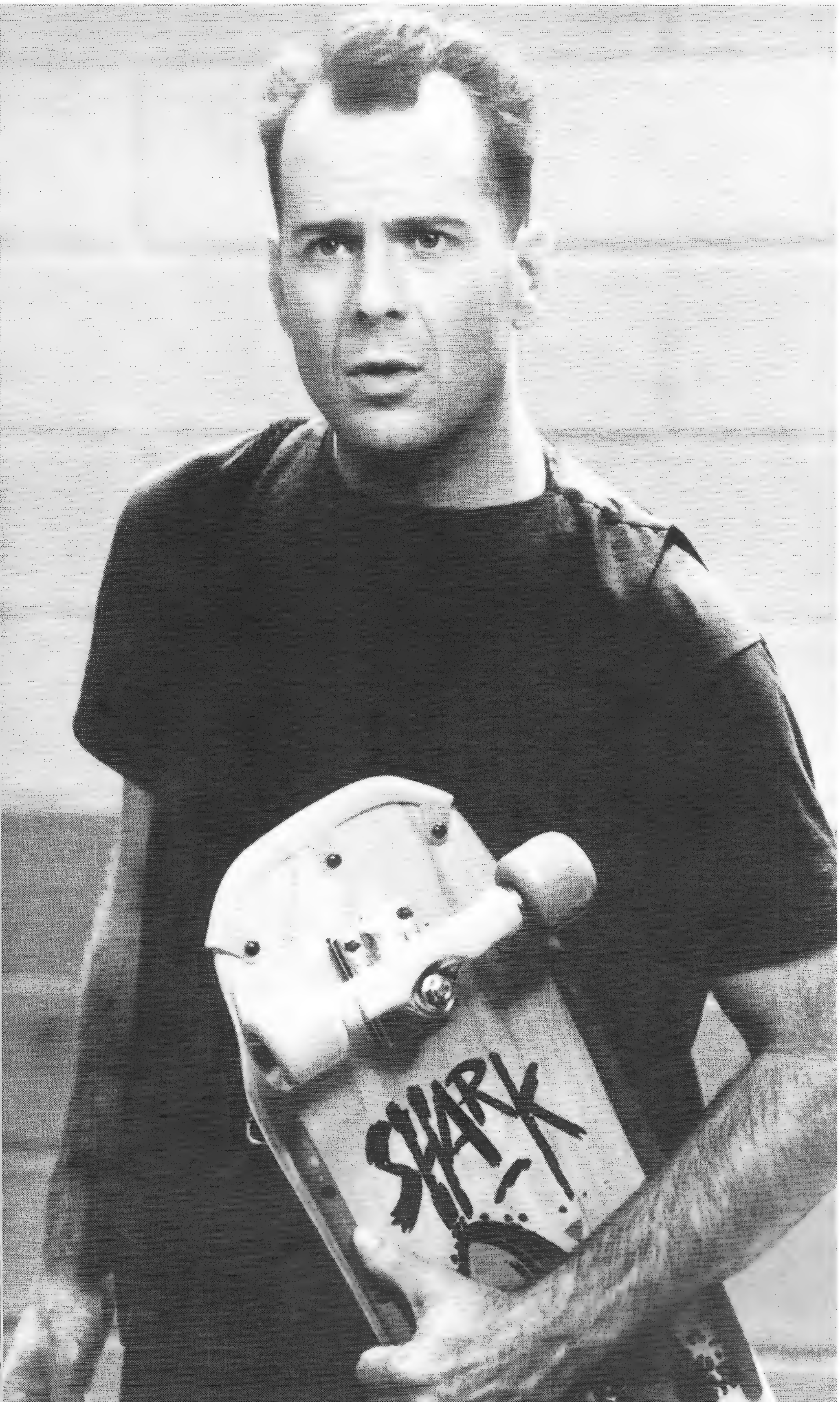




BRUCE WILLIS

# HUDSON HAWK

# ジョン・マクレーンからルパン3世へ
## 香山二三郎
（コラムニスト）





今を去ること10数年前、成龍（ジャッキー・チェン）が初めて日本に紹介されたとき、友人とその是非をめぐって論争をしたことがある。ブルース・リーのリアルな格闘演技に魅せられていた小生は、「蛇拳」、「酔拳」で見せたジャッキーのコミカルな演技を邪道ととらえていたのだが、友人はコミカルだからこそ逆に彼の凄味が際立って見えるのだといい張ってやまなかった。結局そのときは論争の決着はつかなかったが、今となっては勝負は明らかだろう。小生自身、「プロジェクトA」で彼の凄さに目覚め、以後彼のファンを公言してはばからぬようになったのだから。

この「ハドソン・ホーク」を見たとき、まず思い浮かんだのがその論争の記憶だった。本編をひと言でいうと、宝物の争奪戦に巻き込まれた怪盗の冒険譚といえようが、その怪盗を演じるのがブルース・ウィリスとなれば、当然ファンは「ダイ・ハード・シリーズ」のようなシリアス・タッチの活劇を期待するところだろう。ところがあに図らんや、出来上がったものはブルースいうところの「60年代ふうスペクタクル活劇」を髣髴させるコミカルな冒険ドラマだった！そこで肩透かしを食ったと感じたならば、それはまさにジャッキー・チェンにブルース・リーの乗りを押しつけようとした小生と同じような陥穽におちいったことになるというわけである。

実際ジャッキー・ファンが本編を見たら、彼いちばんのお気に入りといわれる〝アジアの鷹シリーズ〟（「サンダー・アーム」「プロジェクト・イーグル」）辺りと相通じるものを感じる人も多いのではないかな。そり





ゃまあ、いくら“ダイ・ハード・マン”のブルースとはいえ、ジャッキー並のアクションを期待するのは酷というものだ。それでも彼自身、救急車用ストレッチャーに乗ったままニューヨークのブルックリン橋の上を時速35マイル(56キロ)で突っ走って見せたり、「ダイ・ハード」以上のスタントをこなしているというのだから、肉体活劇としても見応えのないはずはない。事実、ブルースは長年暖めてきたこの映画を楽しみながら作り、仕上がりにもごく満足しているというし、画面にもその伸び伸びとした遊び心は全編に溢れている。ブルースいわく、「おかしな演技ほど真剣になって取り組む」とのことであるが、そうした姿勢にジャッキー映画と相通ずるものを感じ取ることが出来るのも、両方の作品に接することが出来る日本の映画ファンならではの特権なのではないだろうか。

いっぽう日本の映画ファンの中には、本編にジャッキー映画とはまた別の作品を髣髴するかたもいるかもしれない。いわずとしれたルパン3世である。むろん「ルパン3世」はモンキー・パンチが作り出したマンガのヒーロー・キャラクターであるが、ご存じのように、その後この作品はアニメ化され、TVや映画でも人気を博した。とりわけ宮崎駿監督の「ルパン3世　カリオストロの城」が日本のアニメ映画史上に残る傑作のひとつとして高い評価を受けているのは知る人ぞ知る。

そのルパン3世とブルース・ウィリス、アニメのキャラと生身の人間という違いはあるにせよ、よく似ているのだ、これが。もともとブルースは2枚目というよりセクシーな魅力で売り出した役者である。そのいかにもタフガイそうな外見に少年ぽい茶目っ気とナイーブさを漂わせているところに人気の因があるとすれば、怪盗ハドソン・ホークはまさに素顔を地でいくキャラというべきだろう。いっぽうのルパンはといえば、こちらもHでお茶目でそれでいて強かな3枚目的キャラを持つ神出鬼没の大怪盗。おまけにふたりとも短髪で細長い顔立ちときては、つい比べてみたくもなろうというものだ。ブルースが脳裏に描いたのは、ボブ・ホープとビング・クロスビーのコンビで有名な「珍道中シリーズ」だったというが、彼が「ルパン３世シリーズ」を見ていないという証拠はないのである。

いやいや外見だけではない。宝物を奪う際ヒット曲を歌って時間を図ったり、ＣＩＡエージェント（ジェームズ・コバーン）一味に捕まった後いきなりローマで目覚めたり、格闘したまま2階のベランダから飛び下りて逃走したりと、ホークとトミー（ダニー・アイエロ）の行状はまさにアニメさながら、「ルパン３世」の実写版ともいうべきブッ飛びようなのである。当然ながら、彼らにつきまとう敵の面々も普通ではない。冒頭、彼らを脅すマフィア兄弟が「マリオ・ブラザース」だったり、（もちろんニンテンドーの超ヒット商品)、ＣＩＡエージェントの部下たちが皆、菓子の名前だったり(特に7変化の「キットカット」が秀逸)、世界制覇を狙うメイフラワー夫妻がSMマニアだったり（メイフラワー夫人役のサンドラ・バーンハードは存在そのものがアニメ的)、これまたリアル世界のキャラとは到底思えないカッ飛びようだ。

もっともブルースが「60年代ふうスペクタクル活劇」を髣髴させる現代活劇を作りたかったというのもまた間違いないことである。マニアックなファンなら、たとえばバチカン博物館での強奪場面にウイリアム・ワイラーの「おしゃれ泥棒」やジュールス・ダッシンの「トプカピ」を、その後屋根伝いに逃亡する場面にアルフレッド・ヒッチコックの「泥棒成金」を思い浮かべる人もいよう。また囚われの身となったホークに向かってメイフラワー夫人が、「もっとデビッド・ニーブンの映画を研究しなさい」という台詞を吐いたりするが、これがブレイク・エドワーズの「ピンクの豹」（クルーゾー警部シリーズの第１作だ)を意味しているのは明らかだろう。あるいは007のライバルのひとり、「電撃フリント・シリーズ」の主役を務めたジェームズ・コバーンが見せ場を作るのも「60年代」的趣向のひとつなのかもしれない。

いずれにせよ、そうした60年代の犯罪・活劇映画をコピーしたりパロディにしたりしているうちに、いつしか「ルパン3世」的世界が開けてきたというのは、彼我の活劇映画の行方を考えるうえで極めて興味深い問題ではある。

小生、もし2作目を作るなら成龍との合作にしたらとか、「ロジャー・ラビット」のようにブルースを「ルパン3世」のアニメ世界に放り込んだらとか、あらぬ想像を膨らませて楽しませてもらった次第だが、このコミック冒険活劇、果たしてアナタにはどんな刺激を与えてくれるだろうか。











BRUCE WILLIS
HUDSON HAWK

# STAFF PROFILE プロフィール





## 製作
## ジョエル・シルバー
### PRODUCED BY JOEL SILVER

N.A.T.O.選出による'90年の"プロデューサー・オブ・ジ・イヤー"に選ばれ、名実ともにヒット・メイカーとしての地位を不動のものとしたシルバーは、ニュージャージー州生まれ。ニューヨーク大学映画学科に進み、在学中に製作した"TEN PIN ALLEY"が彼の製作処女作。卒業後はロサンゼルスに移り、アシスタント・プロデューサーとしてローレンス・ゴードンのもとにつく。「ウォリアーズ」('79)ではアソシエイト・プロデューサー、「48時間」('82)「ストリート・オブ・ファイヤー」('84)「ダイ・ハード」('88)「ダイ・ハード2」('90)等でゴードンと共同でプロデューサーを務める。自身が主宰するシルバー・ピクチャーズでは、「コマンドー」('85)「リーサル・ウェポン」('87)「リーサル・ウェポン2」('89)等で大ヒットを飛ばし、彼が製作に携わった作品の世界配収を合計すると、実に10億ドルを軽く超えることになる。



## 監督
## マイケル・レーマン
### DIRECTED BY MICHAEL LEHMANN

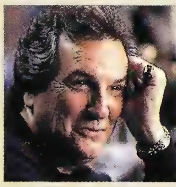
サンフランシスコ生まれ。カリフォルニア大学バークレー校でアートを専攻。NYのコロンビア大学では哲学の学位を取得。卒業時に、西ドイツのダビンゲン大学で19世紀の哲学の研究をする認可を受けた。

アメリカに帰国後、コッポラのゾエトローブ・スタジオで実験的なビデオ・システムによる映画監修を行なう。手がけた作品には『ワン・フロム・ザ・ハート」('82)「ランブル・フィッシュ」「アウトサイダー」('83)がある。USCに戻り映画製作の学位を得た後、"THE BEAVER GETS ABONER"と「サタデー・ナイト・ライブ」での短編"ED'S SECRET LIFE"で注目を集め、ニューワールド・ピクチャー製作の「ヘザース/ベロニカの熱い日」('89)で監督デビュー。ポップなスタイルと鮮烈な映像感覚が話題を呼び"現代の「理由なき反抗」"と絶賛された。「ハドソン・ホーク」はダブニー・コールマンが出演した"MEET THE APPLEGATE"に続く第3回監督作品。





# CAST PROFILE プロフィール



## ダニー・アイエロ（トミー・ファイブ=トーン）
## DANNY AIELLO as TOMMY FIVE-TONE

　ホークの相棒トニーに扮するアイエロは、1933年6月20日ニューヨーク生まれ。スタントマンから俳優に転じ、ブロードウェイでステージ・デビュー、オビー賞ほか数々の演劇賞を受賞。その後テレビに進出し、"A FAMILY OF STRANGERS" ではエミー賞を獲得している。
　映画デビューはロバート・デ・ニーロ主演の"BANG THE DRUM SLOWLY"（'73)。主な作品に、「ゴッドファーザーPART II」（'74）「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」（'84）「カイロの紫のバラ」（'85）「月の輝く夜に」（'87）等があり、'90年にはスパイク・リー監督の「ドゥ・ザ・ライト・シング」でアカデミー最優秀助演男優賞にノミネートされた。
　シリアスからコメディまで幅広くこなせる中堅俳優として「ハドソン・ホーク」出演後も作品は目白押し、またまたデ・ニーロと共演の "MISTRESS" ほか "29th STREET" "THE CLOSER" が待機中である。





## ジェームズ・コバーン（ジョージ・キャプラン）
## JAMES COBURN as GEORGE KAPLAN

　謎のCIAエージェントを演じるコバーンは、"ラーク"のCMで日本でもお馴染みのベテラン俳優。1928年8月31日ネブラスカ州に生まれ、'52年に陸軍に2年間服役した後、俳優として身を立てる決心で単身ニューヨークに渡る。CMやTVショーの仕事を経て、'59年西部劇 "RIDE LONESOME" で映画デビュー。出演3作目の「荒野の七人」（'60）で注目をあび、以後その特異でクールな風貌を中心に活躍。007のパロディ「電撃フリント」シリーズ（'66～'67）では卓抜したコメディ演技を見せた。その他、主な出演作は「夕陽のギャングたち」（'72）「ストリートファイター」（'75）「戦争のはらわた」（'77）「ヤング・ガン2」（'90）等。ブルース・リーの高弟として知られる空手の名手でもある。







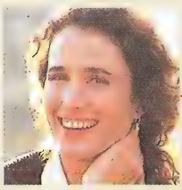


## リチャード・E・グラント
## （ダーウィン・メイフラワー）
**RICHARD E. GRANT**
**as DARWIN MAYFLOWER**

どこかエキセントリックな悪党メイフラワーを見事に演じた彼は、南アフリカのスワジランドで生まれ育った。ケープタウン大学時代に演劇に目覚め、1982年ロンドンで本格的に俳優の道を歩き始める。

BBCのTVに出演したり、数々の舞台を経験しながら実力を蓄えた。その成果は〝TRAMWAY ROAD〞で認められ、最も将来性のある新人として絶賛された。

その後、映画デビューを飾り、「ワーロック」（'89）や「愛と野望のナイル」（'89）に出演。そして昨年は「ウィズネイルと僕」、「ヘンリー&ジューン」で見事な演技を披露した。最新作はスティーブ・マーチン監督のコメディ、〝L.A.STORY〞である。



## アンディ・マクダウェル
## （アナ・バラグリー）
**ANDIE MacDOWELL**
**as ANNA BARAGLI**

ハドソン・ホークが一目惚れする謎の美女、アナに扮するマクダウェルは、これが初のアクション映画出演。1960年カリフォルニア生まれの彼女は、幼い頃から女優を目指し、ニューヨークに出てわずか５日間で名を成したという逸話の持ち主。トップモデルとして活躍した後、'84年「グレイストーク」でスクリーン・デビュー。「セント・エルモス・ファイヤー」（'85）では、エミリオ・エステベスに熱烈求愛される女医を演じて、そのクラシカルな美貌が印象的だった。しかし、彼女が女優として世界的に認められたのは、'89年カンヌ国際映画祭でグランプリを獲得した「セックスと嘘とビデオテープ」の演技による。この作品でマクダウェルは、ロサンゼルス批評家協会賞とゴールデン・グローブ賞の主演女優賞にノミネートされた。近作にジェラール・ドパルデュー共演の「グリーン・カード」がある。



## サンドラ・バーンハード
## （ミナーバ・メイフラワー）
**SANDRA BERNHARD**
**as MINERVA MAYFLOWER**

悪名高きメイフラワー夫人をコケティッシュに演じる彼女は、1956年ミシガン州フリント生まれ。ハイ・スクール卒業後、ハリウッドで歌手修行。'70年代にナイトクラブのスタンダップ・コメディエンヌとして人気者となる。'83年「キング・オブ・コメディ」のグルーピー役で注目された。他の出演作に〝FOLLOW THAT BIRD〞「カジュアル・セックス？」〝TRACK 21〞等がある。作家としても知られ、ピープル誌などで健筆をふるう。



## ●タイトルの由来

1980年のある夜、ロバート・クラフトは、NYのグリニッジビレッジにあるナイトクラブで演奏していた。その時、観客の中から突然ハーモニカが聞こえた。そのハーモニカの男こそ当時まだ無名だったブルース・ウィリスだった。二人は急速に仲良くなり、それから時々ウィリスはクラフトのステージに参加することになった。ウィリスはクラフトのレパートリーの中でも特に〝ハドソン・ホーク〞という曲が気に入っていた。その曲は、クラフトがある昼下がり、マンハッタンのウエスト・サイドを歩いていた時ハドソン川の方向から風が吹いた瞬間思いついたものだ。彼はこの風と、ミシガン湖を襲った暴風が「ザ・ホーク」と名付けられたことを結び付け、〝ハドソン・ホーク〞と決めたのだ。この歌の由来をウィリスに説明した時、彼はこの曲こそが古典的娯楽作のキャラクターのテーマにぴったりだと思った。クラフトはウィリスにこの曲の詞を作らないかと持ちかけた。歌詞と同時に、ハドソン・ホークとその親友であり良き指導者でもあるトニー・〝ファイブ・ストーン〞のキャラクターも出来上がった。この曲は長い間そのままになっていたが、もしどちらかが映画を製作する立場になったら、世界一の怪盗映画にしようと誓った。そしてテレビで人気を得て、エミー賞もゴールデン・グローブ賞も受賞した後、ウィリスはついにクラフトと〝ハドソン・ホーク〞をビッグなスクリーンで展開するに至った。

## ●製作者ジョエル・シルバーについて

ウィリスは、プロデューサーを「ダイ・ハード」のジョエル・シルバーに依頼。「ジョエルはプロジェクトの総てに目を通すことの出来る優れたハリウッドの製作者だ。このことは凄く重要なことだ。ジョエルは、みんなを刺激し、映画に活発で創造的なアイディアをもたらすんだ」とブルース・ウィリスは語る。

## ●ウィリス自らの企画

「ハドソン・ホーク」には、「ダイ・ハード」ファンをより満足させるアクションが必要だと充分承知の上で、ウィリスとシルバーはユーモアを盛り込むことを最優先とした。「このストーリーを展開するにあたって、あらゆるタイプの映画から色々な要素を集めた。例えば、〝泥棒成金〞や〝トプカピ〞のような映画からアイディアをとりいれた。でも出来るだけ突拍子もないコメディにしたかった」とウィリスは語る。

## ●監督マイケル・レーマンについて

ウィリスとシルバーはすべての要素をブレンドしてくれるマイケル・レーマンを監督に抜擢した。監督作品が2本しかないにもかかわらず、









大スターと大製作者の目に止まったレーマンは、このプロジェクトに取り組むにあたって大変な熱の入れようだった。「私はブルース・ウィリスのファンだ。この役にブルースを描くことは簡単だった。素材はすごくシンプルだけど、よくあるアクション・アドベンチャー・コメディ以上のおもしろさを出そうと努めた。脚本が正しく書かれていれば、まずはまちがいなく面白い映画になる。映画にそれ以上の何を望むんだ」と語る。

## ●共演のダニー・アイエロについて

トニー役は全員一致でダニー・アイエロに決定した。ダニー・アイエロとウィリスはお互いが世界的に有名になる前からの知り合いだった。「ブルースと僕はこの3、4年来、一緒に映画に出たいと話していたんだ」とアイエロは語る。アイエロは並々ならぬ熱の入れかただった。彼はウィリスとの世界各地でのロケの為に他の作品を延期したほど。アイエロのキャストを決めてからすぐに他の配役も決定した。神秘的で美しいアナ役に「グリーン・カード」の撮影を終えたアンディ・マクダウェル。悪役のメイフラワー夫妻にリチャード・E・グラントとサンドラ・バーンハード。そして、ジェームズ・コバーンはCIAエージェントのジョージ・キャプラン役にサインした。

## ●ニューヨーク・ロケ

撮影は、ニューヨーク州某所で1990年7月9日にホークが出所するシーンから開始された。そこからNY市内に移り、3週間にわたりニュージャージーやブルックリンでも同時に撮影された。最も複雑で大掛かりなニューヨークのシーンは、まる一週間午後10時から翌朝午前5時までブルックリン・ブリッジで撮影された。ウィリスが救急車のベッドで疾走するシーンはラッシュ・アワーを想定してセットされた。数百人のニューヨーカーたちがウィリスのアクションを見学しに橋の歩道に集まった。ウィリスは地元の新聞にニューヨーカーたちの関心と協力に感謝するとコメントを寄せた。



## ●ローマ・ロケ

ニューヨークでの撮影は7月31日午前6時に終了。一時間後にキャストとクルーは飛行機で、2番目の目的地、永遠の都ローマに向けて出発。世界を駆け巡る冒険旅行へと旅立った。そして撮影は世界的に有名なコロシアム近くで再開され、ほかにはナヴォーナ広場、フォロ・ロマーノ、ファルネーゼ宮殿を含む有名な名所旧跡で行われた。ホークとトニーがスフォルツア像を盗むニューヨーク・スタイルのルザーフォード・アート・ギャラリーでのシーンはローマでも有名なチネチッタ・スタジオで撮られ、ここでアート・オークションの爆破シーンも撮られた。



## ●バチカン美術館の巨大セット

メイフラワー夫妻の凝った会議室とダ・ビンチの古写本を展示したバチカン美術館も巨大なセットとして造られた。ホークが本を盗むために突破する警報装置はユニークなシャンデリア型で、ディスプレイ・ケースが壊された瞬間に光が放射され、自動的に降りたシャンデリアが檻のように犯人を包囲する仕組みになっている。さらにローマでの撮影の途中で、リミニの近くのサン・レオという村に撮影クルーは移動。そこにはダンテの「神曲」で有名な15世紀に建てられた要塞があり、16世紀のダ・ビンチの仕事場と現在のメイフラワー夫妻の邸宅として撮影に使われた。

## ●ブダペスト・ロケ

イタリアでの3ヶ月のロケの後には、別の土地での撮影が待っていた。ハンガリーの首都ブダペストの郊外マフィルム・スタジオでのダ・ビンチのゴールド・マシーンの撮影だった。4ヶ月を費やして製作されたこのセットはこの映画のセットの中で一番巨大で最大のスペクタクルである。セットはマシーンとダ・ビンチの仕事場の2つのパートに分かれた。20世紀にメイフラワーがダ・ビンチの仕事場とされている城を保有してから、部屋はダ・ビンチの作品を展示する博物館に変わったという設定のため、ミラノのダ・ビンチ博物館から何百万ドルもする本物の作品が貸し出された。

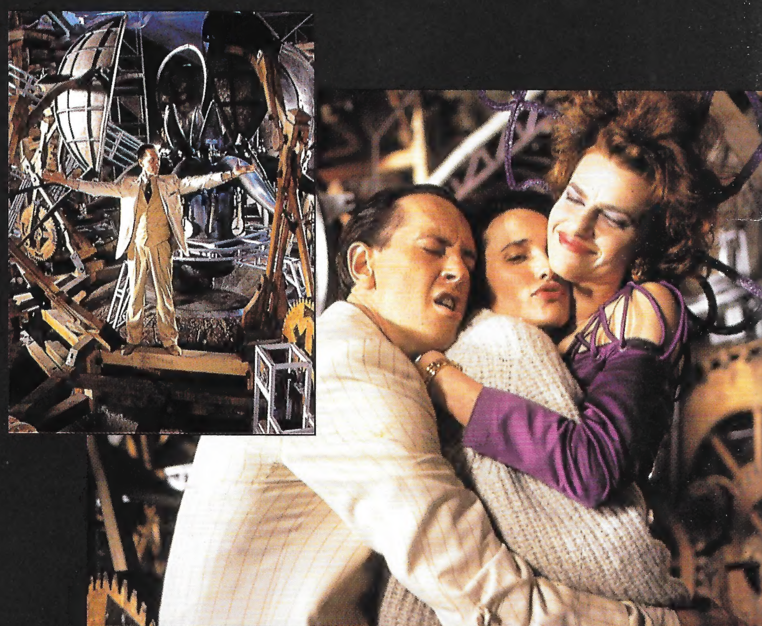


## ●クラシカルなハンググライダー

映画の中でとりわけ目立つルネッサンス調のハンググライダー。これはダ・ビンチの作品の本物の複製ではなく、カリフォルニアのアエロ・ビロンメント社によって設計され製作されたものだが、グライダーはダ・ビンチが研究した人力飛行機と接点があった。この製作会社はダ・ビンチのデザインをもとにダ・ビンチの造型と最新の航空工学に基づいてグライダーを作った。

## ●ゴールド・マシーン

この映画に登場するダ・ビンチの作品の中で、最も力を入れたプロジェクトは太陽熱と化学塩を使用した錬金機である。ダ・ビンチが錬金術に手を出したという歴史的証拠はないが、マシーンはプロダクション・デザイナーのジャック・デゴビアによって考案された。彼は数ヶ月にわたってこれを研究し、発明家の作品をこの映画で使えるように改作した。ジャックは「ダ・ビンチの作品はすごく実証的なものだった。このゴールド・マシーンの製作にあたり、まず機械原理に則し、なおかつ、レオナルド・ダ・ビンチの芸術性と融合させることが出来た」と語る。



## ●イギリス・ロケ

ウィリスと撮影クルーはイギリスでも撮影したが、このロケ地はロンドンっ子さえも分からないであろう。英国郵政局は、市道の下に小形の鉄道機関を設けており、郵便物の分類や配達を補っている。そしてある日この設備はバチカン政府の地下郵便鉄道機関に変身した。そこからロサンゼルスに戻って2日間の撮影を行い、最終的に「ハドソン・ホーク」世界冒険旅行に終止符が打たれた。



## スタッフ / CREDITS

| | | | |
|---|---|---|---|
| 監督 | マイケル・レーマン | Directed by | MICHAEL LEHMANN |
| 製作 | ジョエル・シルバー | Produced by | JOEL SILVER |
| 脚本 | スティーブン・E・デスーザ | Screenplay by | STEVEN E. deSOUZA |
| | ダニエル・ウォーターズ | | DANIEL WATERS |
| ストーリー | ブルース・ウィリス | Story by | BRUCE WILLIS |
| | ロバート・クラフト | | ROBERT KRAFT |
| 共同製作 | マイケル・ドライハースト | Co-Producer | MICHAEL DRYHURST |
| 製作総指揮 | ロバート・クラフト | Executive Producer | ROBERT KRAFT |
| 撮影 | ダンテ・スピノッティ,A.I.C. | Director of Photography | DANTE SPINOTTI, A.I.C. |
| プロダクション・デザイナー | ジャック・デゴビア | Production Designer | JACK DeGOVIA |
| 編集 | クリス・リーベンゾン | Film Editors | CHRIS LEBENZON |
| | マイケル・トロニック | | MICHAEL TRONICK |
| 衣装デザイナー | マリリン・バンス=ストレイカー | Costume Designer | MARILYN VANCE-STRAKER |
| 音楽 | マイケル・ケイメン | Music by | MICHAEL KAMEN |
| | ロバート・クラフト | | ROBERT KRAFT |
| アソシエイト・プロデューサー | デビット・ウィリス | Associate Producers | DAVID WILLIS |
| | スザンヌ・トッド | | SUZANNE TODD |

## キャスト / CAST

| | | | |
|---|---|---|---|
| ハドソン・ホーク | ブルース・ウィリス | Hudson Hawk | BURUCE WILLIS |
| トミー・ファイブ=トーン | ダニー・アイエロ | Tommy Five-Tone | DANNY AIELLO |
| アナ・バラグリー | アンディ・マクダウェル | Anna Baragli | ANDIE MacDOWELL |
| ジョージ・キャプラン | ジェームズ・コバーン | George Kaplan | JAMES COBURN |
| ダーウィン・メイフラワー | リチャード・E・グラント | Darwin Mayflower | RICHARD E. GRANT |
| ミナーバ・メイフラワー | サンドラ・バーンハード | Minerva Mayflower | SANDRA BERNHARD |
| アルフレッド | ドナルド・バートン | Alfred | DONALD BURTON |
| アーモンド・ジョイ | ロレイン・チューサン | Almond Joy | LORRAINE TOUSSAINT |
| キット・カット | デビット・カルソー | Kit kat | DAVID CARUSO |
| シーザ・マリオ | フランク・スタローン | Cesar Mario | FRANK STALLONE |
| ゲーツ | バート・ハリス | Gates | BURTT HARRIS |
| アントニー・マリオ | カーマイン・ゾゾラ | Antony Mario | CARMINE ZOZORRA |
| レオナルド・ダ・ビンチ | ステファーノ・モーリナリー | Leonardo da Vinci | STEPHANO MOLINARI |

1991年9月21日
400円(税込み)
発行所　東京都千代田区有楽町1-2-1　東宝・出版事業室
発行権者　東京都港区浜松町2-8-14　コロムビア トライスター映画会社
編　集　東京都千代田区有楽町1-6-1　㈱スタジオ・ジャンプ
印刷所　東京都港区芝2-1-28　成旺印刷株式会社


CATCH THE
EXCITEMENT
CATCH THE
ADVENTURE
CATCH THE
HAWK
BRUCE WILLIS
HUDSON HAWK
TRI-STAR PICTURES PRESENTS A SILVER PICTURES/ACE BONE PRODUCTION BRUCE WILLIS DANNY AIELLO ANDIE MacDOWELL IN A MICHAEL LEHMANN FILM
"HUDSON HAWK" RICHARD E. GRANT SANDRA BERNHARD DONALD BURTON AND JAMES COBURN COSTUME DESIGNER MARILYN VANCE-STRAKER
MUSIC BY MICHAEL KAMEN AND ROBERT KRAFT ASSOCIATE PRODUCERS DAVID WILLIS AND SUZANNE TODD CO-PRODUCER MICHAEL DRYHURST FILM EDITOR CHRIS LEBENZON PRODUCTION DESIGNER JACK DeGOVIA DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY DANTE SPINOTTI, A.I.C.
EXECUTIVE PRODUCER ROBERT KRAFT STORY BY BRUCE WILLIS & ROBERT KRAFT SCREENPLAY BY STEVEN E. DE SOUZA AND DANIEL WATERS PRODUCED BY JOEL SILVER DIRECTED BY MICHAEL LEHMANN A TRI-STAR RELEASE
DOLBY STEREO SR IN SELECTED THEATRES
READ THE JOVE BOOK
©1991 TRI-STAR PICTURES, INC. ALL RIGHTS RESERVED
東宝
Columbia Tri-Star Films (Japan) Ltd